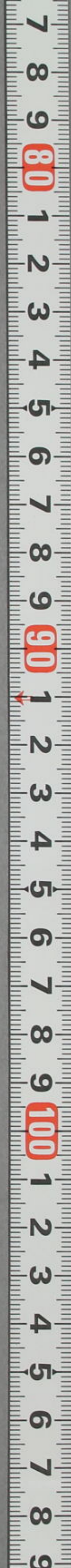


正筆法論



あまたその力くつとわたり筆をふたふ事
く侍はふと大事なる筆のくちとふこと
してそのくちとふことわたりとふこと
あまたと月重山ふたふこととふこと
ふたふこと風大虚ふたふこととふこと
教とあまた筆法ふたふこととふこと
すくくふこと常と雪ふたふこととふこと
ふたふこと池ふたふこととふこととふこと
ふたふこと秋の露ふたふこととふこととふこと

ふたふこと魚ふたふこととふこととふこと
ふたふこととふこと古賢の筆迹ふたふこととふこと
ふたふこととふこと堪能のふたふこととふこと
ふたふこととふこと奥儀の妙ふたふこととふこと
ふたふこととふこととふこととふこととふこと
ふたふこととふこととふこととふこととふこと
ふたふこととふこととふこととふこととふこと
ふたふこととふこととふこととふこととふこと
ふたふこととふこととふこととふこととふこと
ふたふこととふこととふこととふこととふこと

しをくちとてつ(か)らぬものなりしをい
ふはあつちのつちをいふとてなむと
わらうの人(か)しをいふけしむとて
わらういふ車(か)もあはれはあつちの
よりききん(か)しむいふ文(か)し
宗下(か)はきこのつちをいふ筆法論と
あつちあつち自序となむ

傳之前列 松長惟中

澣毫於筆花堂墨池

心正筆法論

目錄

- 一 札懸之事
- 一 硯法式之事
- 一 墨摺極之事
- 一 筆弄手之事
- 一 筆經心持之事
- 一 筆法よき始終事付文字相元之事
- 一 字移りの事

- 一 一の字の呼吸の事
- 一 七種乃筆法の事
- 一 四種字形の事
- 一 文字形の不修の事
- 一 四声乃文字形相の事
- 一 点對横豎の事
- 一 歸天乃筆法の事
- 一 墨名の差別付回の事
- 一 陰陽乃筆大極乃圖の事

- 一 ねてうゝ順逆の事
- 一 死字活字の事
- 一 曲尺の事
- 一 墨白等同の事
- 一 重字合字離字の事
- 一 筆法六義の事
- 一 十二筆法の事
- 一 一文字九品付寶珠平等の事
- 一 文字病跡の事

机乃寸法

高八寸

長三尺

他本二尺五寸とある

廣一尺二寸

厚四分



寸法の定規年月日時を表し居
るものなり

硯法式之事

新名曰硯者研也
可研墨使和濡也

一硯をゆき石と第一とせしむるなり

あまのりきり石面平均してうも

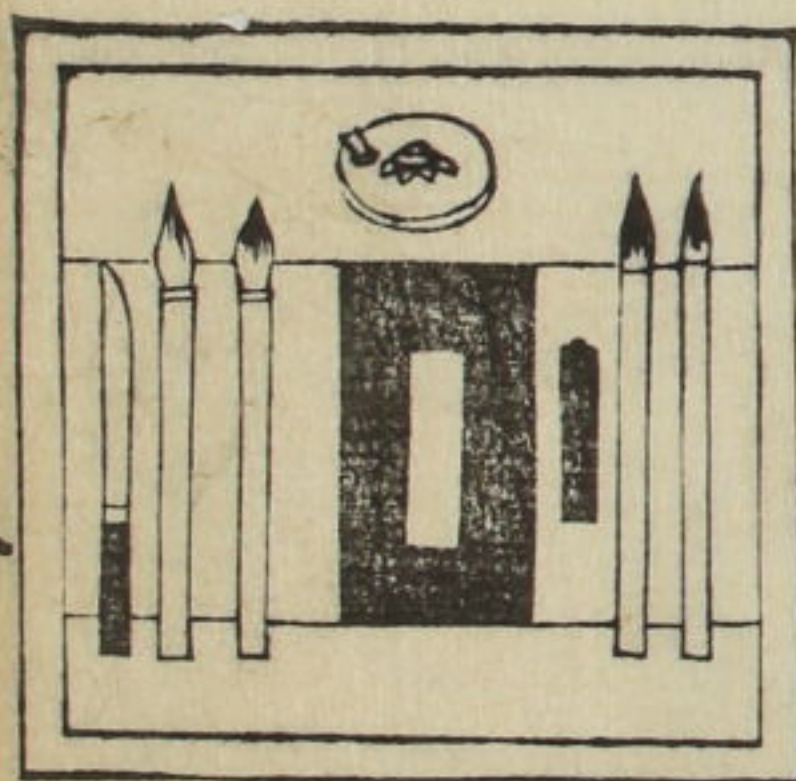
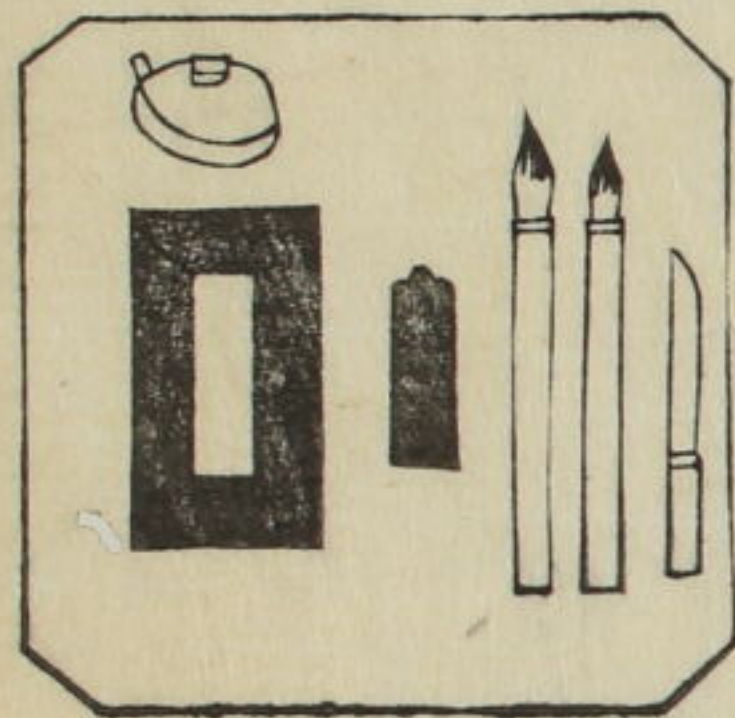
みよる面をもちゆへに宜海に風うら

すむるもの寸法堅き寸横四寸九分

瓦硯乃折敷に置候

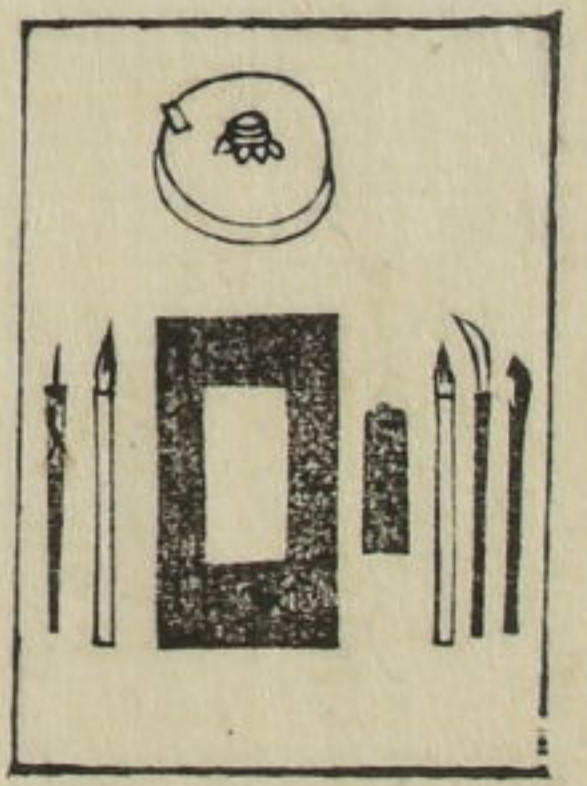
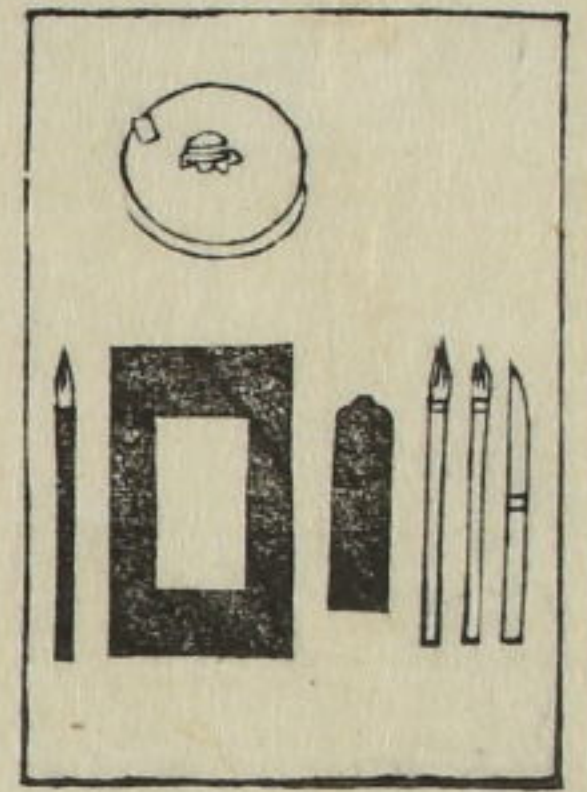
筆臺に墨候

○劉愷之
古今記
興平石
穴深二
百尺青
石色堪
為硯
○後証記曰
魯國孔子
廟中有紫
石硯一枚



日野殿湯息長綱沙
右馬殿忠雄之流也

勸修寺桂大納言
光頼之流也



此より右筆よりより力に注なり常の
置極も諸流あり事多しと墨之

墨掬極の事

一墨を第一より掬りて水に

圓機活法
洗硯只題
松滋深汚石郷
侯洗滌魚吞墨
水遊

所いし事多しと貴人乃前より
をたのまじり前より墨やうと石面を志
てあてゆるやふたへ雨の字より
掬て右より一す事禁之

五者 墨よりて水よりあて墨
りて移て忍しりああま時と石
面を新しくしてとあてな

三品口傳

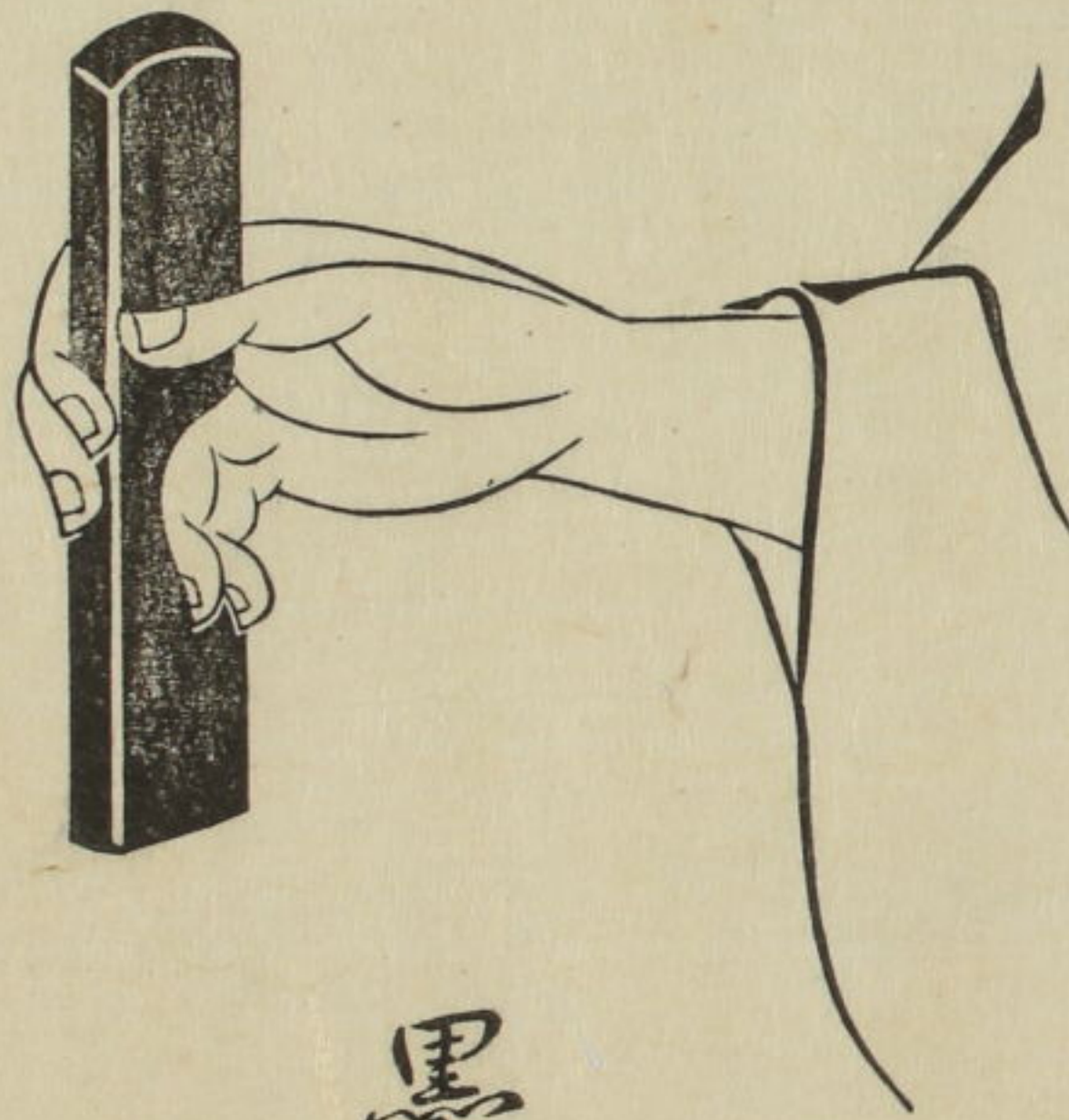
真とことすりて中の記より

行と少あとも水もあつてくくし
 車へうもくもあつてくくし
 古典りはな

愚考 一冊すも墨て朝のてくくし
 かな 古傳く 墨をすあゝあゝ泡をぬ
 う江耳あをけくくし金てくくし
 愚考 地く 紙く 墨くうくくし
 肉くくくくくくくく 胭脂或る
 青黛をすくくくくくく 是大秘事

なめくくくくくくくく 寸みくくくく
 ありくくくくくくくく 墨く格外な

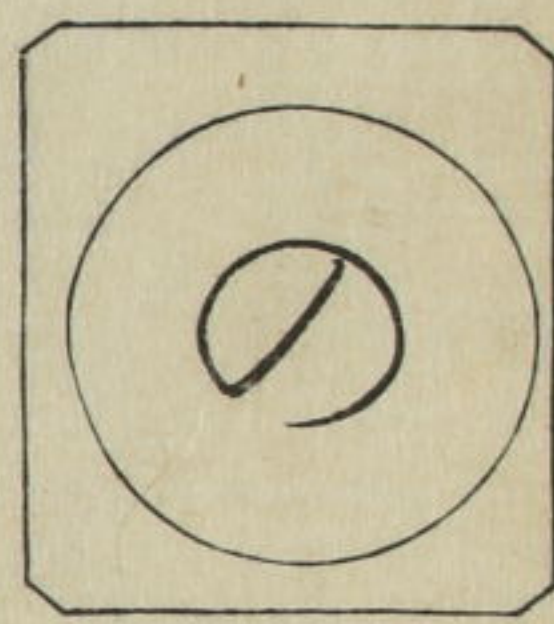
款名曰墨者晦也言
 似物晦黒
 陶家餘事曰玄宗御
 按墨曰龍香劑
 文室四房收墨以豹
 皮囊貫字遠温
 常仲将墨方曰以真
 珠一兩麝香半兩皆
 細後都合下鉄臼中
 棒三方杵杵多愈益



墨摺圖

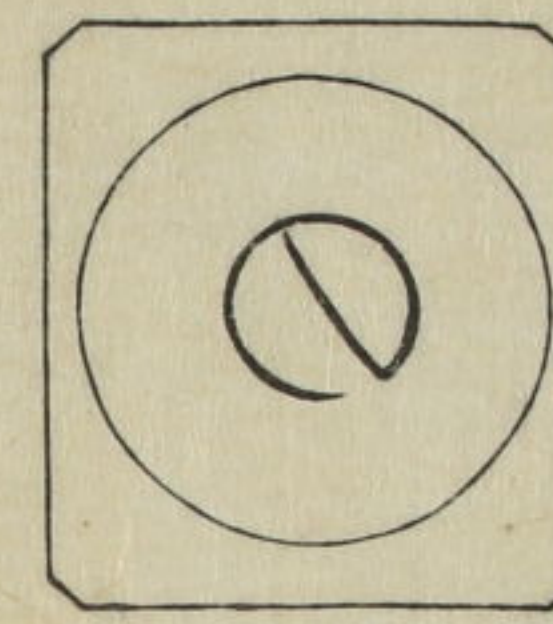
後漢書く 墨硯乃二物を文字とせり
 畫帝乃代く 硯と墨硯の硯

の右



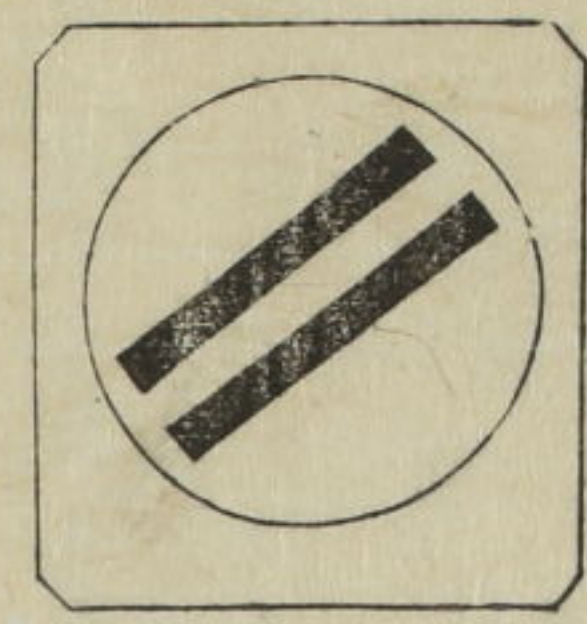
是と平生いふ所極なり朋友
乃前小富と磯乃とを擗て

の左



流人或は刑小行の者の前
よりす所やうか海を擗て

角
ち
て
の
圖
の



分或と親師乃前うてす所
極なり中とす所いふや

筆拳の事

一中指のうの中分を墨頭指の中折目
管をいせぬ指のけうとサとをなして手
乃うらと鶏卵と拳りいふけいぬわとて
いふやういふいふいふ

古傳に筆を餓子いふとせあると
とせをいふと此は是直行草うら
いふ所あるなりいふ所あるなり
筆とさふいふと勸しう事能書の

所為... 隨分... 手首... 思惟...

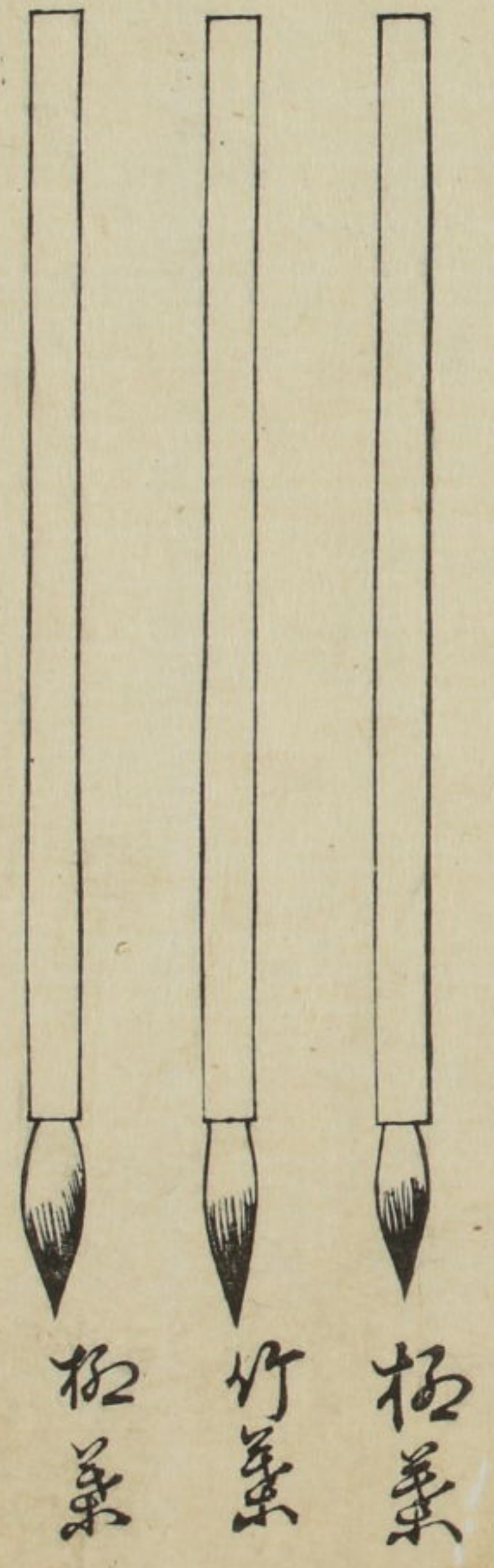
惠... 文字乃大... 腕肘... 思惟...

張華博物志曰秦蒙恬造又曰舜造
筆古今註曰牛亨問自古有書契以
來使... 有筆世... 蒙恬造筆何也恬
始... 秦筆耳以... 括木為管鹿毛為柱半

叙名曰筆述也謂能
述事而言之
手義之筆經曰昔人
以琉璃象牙為筆管
然須輕使若重則不
為實也

毫為被所謂蒼毫非兔毫竹管也由
此觀之則以羊毫為筆斯蒙恬所製
也說文曰楚謂之聿吳謂之不律燕
謂之弗秦謂之筆

草行真



簡毛之法者韋誕筆經曰製筆之法

傑者居前ニ劣者居後ニ強者爲ニ又ニ弱者爲ニ輔參之以ニ棘ニ音頃束之以ニ管固ニ以ニ漆液津以ニ海藻ニ

法書苑歐陽通以ニ象牙犀角爲ニ筆管ニ狸毫爲ニ心覆以ニ秋兔毫ニ

管之寸法

真管五分 行管寸 草管五分 又寸

五考 長管、短管あり 又

古傳、白管を常より好む（墨管を

禁之の事あり

筆の心、毫よりなる事

真一寸に取行 寸草 寸分 寸

是大概なり五考字の大やうなり（

真行草三態、寸、分、毫あり

真とある墨をぬく（

行草とぬく（

かなと真をぬく（

漆液とすのうけ、（

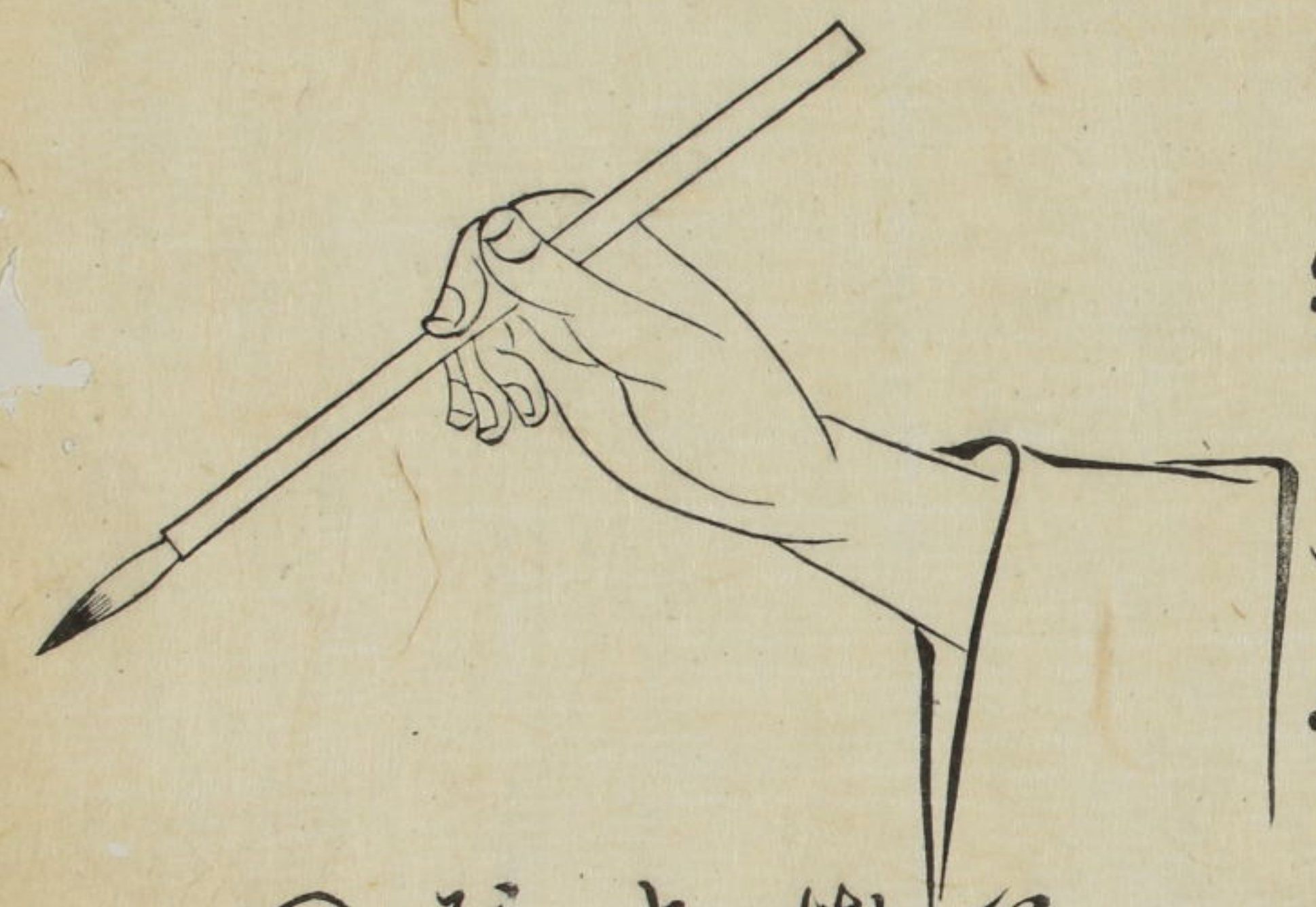
後唐黃鳴學問軒
然有志局同列有
假其筆者怒曰是
筆他日當斷本
不可假也

尾を引くことにて筆の色すなり
と云ふやうにて

筆の力よりその色はさうして
筆の筆のしるしと云ふ事なりて必練
りて筆のしるしを常としてかき結ぶなり
山陰の好筆なりと云ふて其と詔書
の語ありなり況んは筆をや大師の筆工
坂井名氏名清川或は槻木氏名小泉

筆拳乃圖

尊圓親王普通之筆拳



筆拳はよりし嚴
樹なりと云ふなり
と云ふ事なりなり
は強弱の中回なり

宣海筆琴



墨數曰筆取崇山絕仅
中兔毛个九月収之筆
頭長一寸管五寸鋒齊
腰強者揮灑作之患註
者毛端無長短也腰強
者筆毛起又立之事也

性靈集曰良工先利其刀能書必用好
筆刻鏤隨用改刀餘池逐字變筆字有
篆隸八分之異真行草篆之別餘寫殊規
大小非一對物隨事其跡衆多乎然不
能造患按字跡有異
筆工尤異

筆經心りの事

先のとうひと回る一その心ゆんを如
へるが凡精神動さ或るいは或るがや
み或る人とうほあうとくつとん

釈名曰紙砥也
曰平滑如砥石
也

とがふも点盡みよけく筆力あつても
字形平しうも筆心ぬや墨多きため
是事理乃二法と一体かぬゆへなり
それゆへに筆心固所をわけて机を
かゝすやとてい塵穢をのぞきあへ
き水と墨ぬぬすみとすうとてうり
あつての教のく墨をと先早かると生
りてかゝる

古傳曰遲筆開時墨子之悲早筆嵐

韓子之愁 愚考是事出麒麟抄

諸筆と下と所々精彩をけくして墨
わくぬくも文字肥すみとてかゝる
も文字やとて文字やとぬけと骨筋と
文字肥ぬけと肉とぬけしその中同ふぬ
て真行草三態思惟して

晉王羲之曰肥而肉不可生瘦而皮骨
不可見 愚考出書不詳

諸氣をとのふとて他念をやめて

かゝるゝのゝゝあひひし七種九品
乃点益ねのゆゝゝあやほりく横
引取ゝゝ引ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
法混温すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

蔡邕筆論曰書者散也欲書先散懷抱
仕情恣性而後書之若迫於事虽中山
愚註是山兔毫不能佳也夫書先默坐
蓋趙固也
靜思隨意取適言不出口氣不盈息沉
密神采如對至尊則無不善蔡邕者後
漢之人也

太師性靈集曰古人筆論曰惠按古人者蓋
是蔡邕書者散也非但以結裏爲能
先生也蓋謂必須遊心境物散逸懷
結裏者蓋謂必須遊心境物散逸懷
字益平固矣
抱取法四時惠註法者象形萬類惠
形者字以是爲妙矣惠考太師之象
形也先生所謂每見萬類皆
書象之蓋亦是此意也

尚好く考へし

筆法ニせし終事付文字根元の事

一筆法をいふはけしきなり
あつていふ鳥の地をさるゝ様は唯出
云長高懸のつていふ文字を蒼頡
巧みして鳥のあつていふなり

太平廣記曰古文者黃帝史蒼頡所
造也頡首有四目通于神明仰觀奎
星園曲之勢俯察龜文鳥跡之象博
采衆美合而爲字是曰古文愚考曰
蒼頡者
一萬三千七百五十一字天竺龍樹者
三千一百一十七字作也

その筆はけしきなり引捨をいふは
身あつていふはけしきなり文字のあら
いなりと死字なるは鳥のぬくこと
も其様は引きていふはけしきなり
あつていふはけしきなり是を捨
不捨の点をつかひけしきなりあつてい
ふはけしきなりあつていふはけしきなり
あつていふはけしきなりあつていふは
けしきなり

鳥乃やねふ跡ふいふ由きより

孫心ふあわ

孫心ふ

鳥乃のふ

鳥乃のふ

是と捨不捨乃をふ

是と捨不

捨の跡

鳥乃のふ

孫心

字移の事

一筆あり字をふらふはひりあふとて
ふまふふふふふふふふふふふふふ
新減のふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
かふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
のふふふふふふふふふふふふふふ

古藤のま
のふら翠

安

引すたる水の
がねをさふ
膝もと流水
乃をさふ

行草の字と大やもーりわめし筆つら
なもこまみか字の極めところりつら

消息手あなまの字うはむいふと前
あはるらむ

朝夕暇事

是一字のうらふあふてふもはむいふと
あふらけいあふらむいふと
とら字のえとあふらふきしてもの
字のうらふあふてふもはむいふと

自
古
如

け
す

わ

子
 子
 子

この敷忠乃一眉と爲圓は親王乃正
筆より快しと云なり文字乃う快なりと
はききみなりと一息もよの息盡とあり
かたしななりと多しと極とあり
心とありとありと心乃極とあり
ふとく能くの手迹とありとんみ心
て

呼吸要事

一文字の息とていふ事ある息と

はめてかき事なたるを引おほふと
 うへへも息をばめておほふとさなり
 と息あいのきふ天然とこの精靈文
 字よこのうとよふをばふおし

七種乃筆けいの事

多リ多リ多リ多リ多
 春 踊 殖 折 曲 回 捨
 多リ多リ多リ多リ多



春 踊 殖 折 曲 回 捨

一字のうと七種乃筆けいの事
 口傳しふ不習とふはうとふとふ

四種字形の事

一行住元卧乃字形なること得なりと
 事不切第一が文字よじふとけい
 あわとのじふとけいなること得なり
 行うら乃字をたしな形なること
 こ乃四字のけいをたしな形なること
 うとふはう

行跡 住 舟 自 也 即

行とて文字堅うてあはれむらわ
何とて文字すくなくあはれむ
たとて文字たしあはれむ
卧とて文字あはれむ
文字のうらやま不得事

一大師三迹よりあはれむ字形よりあはれむ流別

高松堂

六ツ田

